SINCE 1981
ORDER MADE JEWELRY

K.UNO NEWS LETTER

Vol.30

ケイウノは全国に店舗展開するジュエリーのオーダーメイドブランドです。
この広報通信では、毎月１回、ケイ・ウノのジュエリーやオーダーメイドに関する
さまざまなヒト・コト・モノの情報をお届けします。

美術と工学が結びつくことで新しい可能性が広がるのではないかと思っています

ケイ・ウノは、個人のお客さま以外にもさまざまな企業やプロジェクトとコラボして、ジュエリーを製作しています。

今回ご紹介するのは、「女子美術大学」で、日本画の教授として長く教鞭を執られてきた橋本弘安名誉教授とのコラボレーション。天然顔料研究の第一人者でもある橋本先生が粉砕された岩絵具を用いて、2つのジュエリーを製作させていただきました。ジュエリーのデザインを担当したのは、女子美術大学のＯＧでもあるケイウノデザイナー浅川浩子。製作を担当した職人 鈴木郁恵と共に、女子美術大学に橋本先生と稲田先生をお訪ねしました。

写真中）橋本 弘安 氏
女子美術大学名誉教授
日展日本画部特別会員　一般社団法人粉体工学会会員
天然岩絵具を中心とした材料研究・日本画創作研究を専門とする。

写真右）稲田 亜紀子 氏
女子美術大学芸術学部美術学科日本画専攻准教授
日展日本画部準会員

写真左）浅川 浩子
株式会社ケイ・ウノ デザイナー

※女子美術大学美術館に展示されている
日本画家 三谷十糸子女史の作品前にて撮影

日本古来の顔料「岩絵具」が持つ多くの可能性

―まずは、今回製作させていただいたジュエリーにも使われている岩絵具について教えていただけますでしょうか。

橋本：岩絵具は、日本画の材料として用いられる顔料で、天然の鉱石や半貴石を砕いて作られます。自然の鉱物を用いた画材は世界の中でもユニークで、店舗に行けば誰もが買える形で売っているのは日本くらい。非常にまれです。

最近は合成の顔料が主流となっていますが、僕は自然のものにこだわっています。３０年ほど前から自分で石を砕いたりしているのですが、細かく粉砕することで活用の範囲が広がるのではないかと考えていました。２０年ほど前からは「粉体（ふんたい）工学会」という学会に所属し、素材をナノレベルまで微小にする研究を重ねています。

―顔料をナノレベルまで細かくすることで、活用の範囲が広がると。

橋本：そうです。ナノテクノロジーを使って細かく粉砕することで手の平大の顔料でテニスコート一面を塗れるようになります。自然の恵みである天然の鉱物は希少です。安定した生産ができない顔料は大量生産の社会には向いていませ

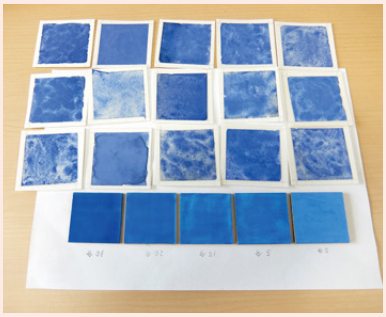
んが、少量・中量ではさまざまな形で活用ができると思っています。今回のジュエリーもその一つといえるでしょう。

―先生はラピスラズリの壁をつくるプロジェクトも進めておられるとか。

橋本：愛媛県の新居浜市にある美術館で取り組んでいる「ぼくたちわたしたちの壁」というプロジェクトですね。

数ミリのラピスラズリから、参加者一人ひとりが好きな〝青〟を選んで、粉末状に砕いて岩絵具をつくります。それを5センチ角の和紙に塗るという工程なんですが人それぞれ最初に選ぶ青が違ったり、同じピースを使っても異なる青になったり、どれ一つ取っても同じ青がありません。その多様なところが非常に面白い。

5センチ角の和紙100枚で50センチ四方の1枚のパネルを作り、それを30枚並べて壁にするんですが、来年あたり3000枚を越えそうなので1つの壁面を埋めることになると思います。



（左）岩絵具のもととなる鉱物や半貴石（中）岩絵具を作成中の様子（右）一人ひとりが好きな"青"を砕いてつくった岩絵の具で着色したピース

関わるスタッフ全員でとことん話し合い 最上のジュエリーをつくり上げる

―製作されたジュエリーについて、デザインを担当された浅川さん、説明をお願いします。

浅川：橋本先生に粉砕していただいた翠銅鉱、ラピスラズリ、アズライト富士山の石、ネパールの石、計5種類の顔料を使って、ラペルピンとペンダントトップの2点を製作しました。先生が直接身につけられるものがよいのではと考えラペルピンをご提案。学会や教鞭を執られる時にお召になるスーツに合わせられるアイテムとして、実際にジュエリーを見せながら研究についてお話もいただけたらと。

ラペルピンは、先ほどお話されていたラピスラズリの壁プロジェクトをイメージして、四角いタイルを組み合わせた形にしました。また、先生は紺系のスーツをお召しになるイメージがあったので、付けた時にラピスラズリのブルーが沈まないように、四角い枠を少し太めにして、枠自体が反射した上で顔料が目立つようにデザインしています。日本画は平面ではありますが、橋本先生の研究は奥深いものですので、デザインに高低差をつけ、奥行きを出しています。

―浅川さんは日本画を専攻されていたということで、顔料の扱いについては慣れていらしたと思いますが。

浅川：いえいえ。ジュエリーに顔料を使用するのは初めてでしたので、ずいぶん試行錯誤しました。

途中、輝きを出すために、粗めの顔料を使うことも検討しましたがナノレベルに粉砕したものの方がジュエリーとして色が綺麗に表現できるなど、発見も多かったですね。

―製作に関わられた鈴木さんはいかがでしょう。ご苦労された点は？

鈴木：私も顔料をジュエリーに用いるのは初めてでしたので、工夫をしたところはいろいろあります。

橋本先生のラペルピン

今回、日本画で接着剤として用いるニカワを使わず、代わりにふのりを試してみたり、塗布する顔料の量をコントロールしたり。

あと、地金にそのまま顔料を塗ってしまうと、ひび割れがしやすかったので、先に地金の表面に薄く樹脂を塗って、顔料をなじませるような工夫もしています。

橋本：顔料自体があまり世の中に出ていないので、浅川さんのデザインに対するこだわりや、鈴木さんのノウハウは非常に貴重なものといえるでしょうね。ラピスラズリは石としては透明感はないのですが、完成したジュエリーのラピスラズリには透明感がある。そうしたことも工夫していただいたように思います。

植物をイメージした稲田先生のペンダントトップ

―もう一つのペンダントトップについてお話を聞かせてください。

浅川：こちらは、稲田先生の作品に因んで植物をイメージしたデザインにしました。葉をモチーフにしたパーツが、メインとなるバロックパールを包み込むような形になっています。顔料を囲む地金は、ラペルピンはシルバーですがこちらはイエローゴールド。植物は息吹を感じさせるものなので、生命の力を表すにはイエローゴールドがいいかなと。また、身に着ける稲田先生の肌色がより美しく見えることも意識しました。

あと工夫したのは、パールと顔料のパーツの間に空間を入れて、風が通る感じを表現したこと。立体的に重なるデザインにしてあります。

―繊細な造作ですね。鈴木さんが大変だったのでは？

鈴木：そうですね。パールの形が独特なので、接着できる箇所が限られていて。そこを探し出してはめ込んで固定するのが難しかったですね。

浅川：鈴木の他にも製作に関わる職人全員と何度もやり取りをして調整しました。顔料がどれだけ見えるかにも気を使いましたね。小さすぎると色が見えないし、パール自体の魅力を活かすためにも覆いすぎないようにしました。

日本画の魅力とジュエリーとして身につけることのバランスを計算しながら創り出していった感じでしょうか。

稲田：デザインができあがるまでの経緯、それをさらによくしていく工程を見せていただいたのがとても興味深かったですね。最初のイメージは保ちつつ、細かな点を変えることでどんどんよくなっていくのが明らかでしたから。

浅川：バロックパールは、向きによって見え方が全然違うため、平面で描いていてもわからない部分があって…。それぞれの製造工程において関わった職人が、プロフェッショナルとしてどうすればジュエリーが最上のものになるかを考えていきました。

ケイ・ウノは自社の職人と直接やり取りができることが強みです。デザインだけでなく、先生からいただいた資料なども共有してとことん話し合いました。ただ、こうしたことは今回に限ったことではなく、お客さまからご注文をいただいた時もまったく同じように取り組んでいます。

職人の鈴木（右）を交えて、ジュエリーに込めた想いや製作過程を振り返る

素材自体が持っている物語性を制作物に活かしていく

―橋本先生にうかがいます。今回の製作を通して、岩絵具という顔料の将来についてどのように考えられますか。

橋本：冒頭でも少しお話しましたが、鉱物や土をナノレベルで粉砕することで、用途の可能性が広がると思います。

鉱物にしても土にしても、素材自体に物語性があるところが面白い。例えば、今回使っている富士山の土を使ってぐい呑みをつくり、お酒を注げば〝富士山に注ぐ〟ことができますよね。隕石を使えば〝宇宙に注ぐ〟ことができるわけです。

富士山の土で塗装した陶器。後ろは展示ブース

要は、美術に対するこれまでとは違う価値観が生まれるということです。有名な作家がつくったとか科学的に価値があるとかではなくて、彩色されている顔料自体に物語があり、ある種の付加価値を持っているという。

そして、それは富士山や宇宙といった特別なものだけでなく、もっと身近な、例えば母校の校庭の土や、恋人同士が出会った場所の土でもいいわけです。その人にとって特別な意味を持つ場所の土。そこには物語があるわけですから。

ただ、希少な天然の鉱物があっても、すぐれた粉砕の技術があっても一般的な製品にまで落とし込まないとわかってもらえません。もっとわかってもらい、知っていただくためにも今回のような形を含めて、さまざまな可能性にチャレンジしていきたいと思っています。

小学校の校庭の土で製作した岩絵具。各校で色が異なる

―天然鉱物と最先端技術の組み合わせに、大きな可能性を感じました。今日は本当にありがとうございました。

岩絵具で彩色したさまざまなアイテム。やさしい色合い

10月の誕生石「オパール」

リングの中央に輝くオパールは、ご親族から譲られたという由緒あるもの。左右対称に配置された両脇のダイヤモンドが一層の華やかさを添えています。

見る角度によって、多彩なきらめきを放つ“遊色効果”を持つことで人気の高いオパールは、幸運をもたらすとされる宝石。細長い板をねじったようなアームのデザインがアンティークな雰囲気を演出して、クラシカルで上品なリングになりました。

2019年10月22日発行　第30号　発行：株式会社ケイ・ウノ　広報：川村　（構成・文：浅井美江）
ケイウノ自由が丘オフィス　〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-15-22　TEL 03-5731-7847　FAX 03-5731-7852　Mail press@k-uno.co.jp